

# 学会ニュース

## 目次

・ 学会費納入のお願い（飯田 賢穂）	..... 1
・ SMOOSY導入のご案内	..... 1
・ 第47回大会について（大石 和欣）	..... 3
・ 18世紀思想と近代の歴史的共時性（安藤 隆穂）	..... 4
・ Otium helveticum（秋元 陽平）	..... 5
・ 『日本18世紀学会年報』第40号公開の遅延についてのご報告とお詫び（王寺 賢太）	..... 7
・ 事務局より	..... 7

## 学会費納入のお願い

飯田 賢穂

日本18世紀学会の会計年度は、4月1日から翌年の3月31日です。SMOOSY導入以降、マイページを通じて多くの会員の皆様に年会費をお支払いいただきましたが、まだSMOOSYにアクセスしておられない会員もおられます。学会の活動は皆様の年会費によって支えられています。過年度分の年会費の支払いのお済みでない会員には、SMOOSY上でマイページにアクセスの上、お支払いいただけるようお願いします。未払いの過年度分年会費がある会員には、追って学会からも請求を差し上げます。また、2025年度分の会費納入につきましては、6月中旬にメールにてご連絡いたしますので、お早めのご対応をお願いいたします。SMOOSYと年会費納入方法について、以下あらためてご案内します。

## SMOOSY導入のご案内

当学会では、学会運営を簡素化・効率化し、学会を長期的に維持するため、2023年度から、株式会社アトラスが提供する会員管理システムSMOOSYを導入しております。

会員の皆様には各自「会員マイページ」が割り当てられており、各自の操作によって、以下の一連の操作が可能です。

- ・ 会員登録情報の閲覧、変更
- ・ 会費納付状況の照会
- ・ 会費のオンライン決済手続き（銀行バンクチェック決済）
- ・ 会費の請求書、領収書PDFのダウンロード
- ・ 学会からのお知らせ閲覧

また、学会からの連絡や会費納入の督促もSMOOSYを通じて一括して行うこととなります。以下では、①会員マイページにログインし、登録情報を更新する方法、および②オンライン上で年会費の支払いを行う方法を再掲します。

## ①【会員マイページ ログイン方法】

- (1) 会員マイページの「初めてログインする方はこちら」をクリックし、会員情報として登録しているメールアドレス（※）を入力して「送信」ボタンをクリックします。
- (2) 「パスワード設定URLのお知らせ」メールが届くので、メール文内のパスワード設定URLをクリックします。
- (3) パスワードを入力し「登録」ボタンをクリックします。
- (4) 「会員マイページ」ボタンをクリックして会員マイページを表示します。
- (5) 画面一番下の「会員情報を変更する」ボタンをクリックし、ご自身の情報を確認・更新してください。

※登録されているメールアドレスは、当学会から会員の皆様にお送りしているメールの受信アドレスとなります。メールが届いていない方は事務局（jsecs18@gmail.com）までご連絡ください。

また、操作方法が不明な場合は会員マイページ画面右上の「ヘルプ」をご参照ください。さらに、一部の項目については、会員による変更ができません。会員種別、氏名、生年月日、入会日（不明者は1800年に設定）等です。これらについて変更を希望される方は、事務局までお知らせください。なお、賛助会員の方はマイページがご使用になれません。内容のご照会は引き続き事務局までお願いいたします。

## ②【年会費の支払い方法】

- (1) まず会員マイページにログインしてください（①参照）。
- (2) 画面上で「請求名称・入金状況」を確認してください。「未入金」と表示される年度の会費の納入をお願いします。
- (3) SMOOSYでの決済は、SMOOSYを運営する株式会社アトラスを通じて、株式会社ROBOT PAYMENT（ロボットペイメント）の決済代行サービス（バンクチェック）を利用しています（※）。
- (4) 「請求/入金情報」欄の画面右側「操作」枠の「支払う」をクリックし、
- (5) 明細を確認の上、「お支払いに進む」をクリックしてください。
- (6) 受付画面（ROBOT PAYMENTシステム）で電話番号と振込人名義を入力します（SMOOSY上で電話番号が登録されている場合は、あらかじめ表示された電話番号のままで結構です）。振込人名義欄にはSMOOSYに登録されている氏名のカナ表記が表示されていますが、お持ちの口座の名義と異なる場合は口座の名義と一致するよう変更してください。一致しないとROBOT PAYMENTシステム上で入金を確認できません。
- (7) 「入力確認」画面で入力事項を確認の上、「次に進む」をクリックし、「決済申し込み完了」画面で「決済申し込み」をクリックします。
- (8) ここで、いったん会員マイページに戻ります。「請求/入金情報」欄の右側に、あらたに「振込先口座情報」のボタンが現れるので、クリックしてください。
- (9) 振込先口座番号の情報が現れます。以下はその一例です。各会員の振込毎に、「りそな銀行アース支店」の「ロボットペイメントシュウノウダイコウ」名義の個別の振込先口座番号が指定される設定となっています。この口座番号は一請求につき一つずつ割り当てられるもので、同一会員であっても年度ごとに異なります。複数年度の会費が未納の方は、お手数ですがそれぞれの請求に対応した口座に入金してください。

例)

0010.りそな銀行	936.アース支店	普通.76****3.か)ロボットペイメント シュウノウダイコウ
------------	-----------	----------------------------------

- (10) 受付メールが届きます。振込先口座番号はメールにも記載されています。
- (11) 指定された振込先口座番号への入金、従来のゆうちょ銀行口座への入金方法とまったく同じ

です。会員各自がオンライン決済なり、銀行での振込なりによって実行してください。

(12) ROBOT PAYMENTで入金を確認され次第、SMOOSYからメールで銀行振込の確認のメールが届きます（数時間、ないし土日を含む場合は数日かかる場合があります）。なお、学会事務局にはROBOT PAYMENTから入金確認後、その都度通知が入ります。

(13) 同時に、SMOOSYの会員マイページ上で「請求/入金情報」欄の該当年度の右端に「領収書を発行する」のボタンが現れます。

(14) 請求書を発行する場合は、「請求/入金情報」欄の画面右側「操作」枠の「請求書を発行する」からダウンロードしてください。

(15) 領収書を発行する場合は、お支払い後、「請求/入金情報」欄の「入金済を含む全ての請求を表示する」をクリックし、「請求一覧」画面右側「操作」枠の「領収書を発行する」からダウンロードしてください。

※年会費の支払いは、事務局の負担の軽減のため、できるだけROBOT PAYMENTを介した入金をお願いします（一請求一口座の効果で、誰がどの年度の会費を払ったかが自動的に記録されます）。従来通り、学会のゆうちょ銀行口座への直接振込を希望される方は、学会事務局まで申し出てください。

学会運営の効率化と維持のため、以上、①登録情報の確認と②年会費の納入につき、会員各位のお力添えをお願いいたします。

以上、ご不明な点があれば、日本18世紀学会事務局（[jsecs18@gmail.com](mailto:jsecs18@gmail.com)）までお問い合わせください。

## 第47回大会について

大石 和欣

第47回全国大会は、2025年6月28日（土）・29日（日）、原田範行会員・井上櫻子会員のご協力のもと、慶應義塾大学三田キャンパスにて開催されます。昨年に引き続き、多くの方々から自由論題のご応募をいただき、今回は13名による発表が予定されております。皆さまの積極的なご参加に、心より感謝申し上げます。

28日午後には、学会企画として、小田部胤久会員による特別講演「18世紀の申し子／鬼子としての美学」が行われます。司会は桑原俊介会員が務めます。

また同日には、開催校企画として、慶應義塾大学日吉音楽学研究室との共催によるレクチャーコンサート「バロック後期の器楽作品に見られる混合趣味」が予定されております。講師は石井明氏、演奏は慶應義塾大学古楽アカデミー・室内アンサンブル（全体指導ほか：石井明氏）によって行われます。

同日夕刻には懇親会も開催いたします。事前申込制となっておりますので、6月12日（木）までに、学会ウェブサイトに記載の申込サイト（<https://jsecs47diner.peatix.com>）よりお手続きください。定員に達し次第、受付を締め切らせていただく場合がございますので、あらかじめご了承ください。

29日午後には、共通論題「余白が語る18世紀」が予定されており、原田範行会員がコーディネーターを務め、貝原伴寛氏、西尾宇広氏、若澤佑典氏、佐藤至子氏よりご発表いただきます。

また、学会参加のため、託児サービスの利用が必要な方は、事前に学会事務局に御連絡いただき、各自お申し込みの上、後日領収書を学会事務局に送付してください。引き換えに費用の半額を学会で負担します。

本大会が、非常に充実した内容となることを、主催者一同、大変うれしく思っております。多くの会員の皆さまのご参加を、心よりお待ち申し上げます。

なお、詳細は学会ウェブサイトの「次回の大会」ページ（[https://jsecs.smoosy.atlas.jp/ja/next\\_conference](https://jsecs.smoosy.atlas.jp/ja/next_conference)）

をご確認のうえ、「第47回全国大会レジュメ集」も適宜ダウンロードしてご活用ください。

## 18世紀思想と近代の歴史的共時性

安藤 隆穂

国際18世紀学会は、世界の18世紀を対象に、自由に研究する学際的学会である。それでも、18世紀が西暦であるように、基準は西洋の近代とならざるを得ないだろう。したがって、18世紀学会の基本課題は、西洋近代像の批判的再生を、18世紀という共時性において世界史的に試みることである。一方で、18世紀思想の西洋圏内部での相互交流と対立を検証し、他方で、「西洋と非西洋」「文明と未開」などの視点で非西洋圏の18世紀近代を発掘し、総合的に、近代に対抗する批判意識の探索をふくめ、近代像の再検証を遂行していく。私は、このように、学会設立の意義を受け止めた。

私は、社会思想史研究の立場から、この学会に、国際啓蒙思想会議の時期より参加した。戦後社会思想史研究に伏在した核心的問題意識は、戦前の「近代の超克」論を克服することにあった。「近代の超克」論は、近代を「欧州文明」と同一視し、これを全否定し、デモクラシー（政治）と資本主義（経済）と自由主義（思想）の「超克」を目指し、「国体」護持の精神の唱道に与した。皮相な近代理解に躓いたのである。その悔恨に立って、社会思想史は、西欧を直接研究対象にする場合にも、同時に、西欧との比較で日本の近代を改めて見直し、近代の普遍性を再創発しようとしていたのである。方法論的にいえば、近代思想の歴史時間的国際転位を把握し、後発地域の思想受容過程に独自の近代の創造を見出し、これを拠点に近代思想の新しい多元的普遍的可能性を拓いていくことであった。それは、非西洋圏の研究者として、学問としての社会思想史の歴史的社会的出自を問うことでもあった。

ところが、この場合、日本においては、西欧の近代思想、特に18世紀思想は、19世紀の明治維新以降、本格的に受容されたということになる。西欧の18世紀に対応するのは19世紀のアジアであり、18世紀の近代的共時性探求どころではないのであった。18世紀の共時性を性急に求めると、西欧的モメント探しにとどまり、後発地域の近代化の独自性をかえって見落としかねないという疑念もあった。

このように、18世紀学会の基本視座との齟齬を自覚しながら、それでも私は、社会思想史の近代認識の枠組みの一つ、具体的には「フランス革命と明治維新の比較」という基礎視座を、18世紀学会に向けて問題提起しながら、予定調和として、日本の18世紀に共時的近代を発掘することをめざすこととした。それが明治維新を起点に日本近代思想史を捉えるという歴史像の見直しにつながるという予感もあった。

私が4年ごとの国際学会大会で報告したのは、合計3回にすぎない。最初は、国際啓蒙思想会議時代の1986年ブリュッセル大会で、「コンドルセ夫人と同感の哲学」（仏語）を主題とし、次は、1991年のブリストル大会で、「コンドルセとコンスタン：フランス革命期における公論」（英語）を報告した。どちらも、18世紀思想の英仏交流の中に道徳哲学の系譜を発掘し、それが「啓蒙的立法者」を批判的に解体し、市民革命（フランス革命）を思想的に準備する過程をたどるというものであった。「フランス革命と明治維新の比較」という問題意識を持ち込んだのであったが、同時に、道徳哲学に着目するという態度は、思想の国際転位を追いかけるという視角とともに、日本の思想史研究、特に、アダム・スミス『道徳感情論』（1759年）の研究が生み出した、独自のかつ先駆的な方法意識であるという自負もあった。英語やフランス語を母語としない非西洋圏の研究からの独自の貢献として何が可能かを模索していたのである。当時私は、別の国際シンポジウムでも、「コンドルセの黒人奴隷解放論」（仏語）を報告するなど、同じ問題意識での実践を試みていた。そして、幸い、英仏独米だけでなくカナダの研究者からも歓迎され、手ごたえを感じた。

日本の18世紀への着地を試みたのは、2003年のロサンゼルス大会での、安藤昌益『自然真営道』（1753年）の思想についての報告（英語）である。実は、これに先立って、1994年のヴェルサイユでの国際

シンポジウム「重農主義の国際的伝播」で、フランソワ・ケネーの日本での受容を取り上げ報告（仏語）していた。ところが、この報告は、1930年代後半の「日本資本主義論争」時の「講座派」によるケネー「経済表」（1758年）の受容に行きついた。明治維新どころか20世紀における、フランス18世紀思想の受容となってしまったのである。知識の伝播はともかく、思想の社会史的受容という点で、18世紀の共時性の確認に挫折したのであった。そこで、方針を変え、日本18世紀思想において、影響関係とは別に、西洋との枠組みの共時性をもつ類型を探ることとし、昌益に狙いをつけたのである。この報告は、結果として、不消化に終わった。自然法思想の18世紀的展開の共時性を示すはずであったが、昌益の「自然（じねん）」と西欧にいう「自然（しぜん）」との違いをうまく説明できず、昌益の「直耕」と英語の概念としての「労働」あるいは「耕作」との違いもほとんど伝えられなかった。質疑応答でも、英語力がありませんと謝罪した。昌益のもつ西洋近代にはない近代性の豊かさを示すことはできなかったのである。しかし、それでも、昌益の思想が西欧にない独自の近代性を示唆していることだけは、少なくとも印象づけられたと思う。そして、このようなアジアの18世紀の発掘のために、アジア圏の研究者が相互交流する必要性をますます強く意識した。国際執行委員（1995-99年）、さらには代表幹事（1999-2003年）の時期などに、アジア圏の研究交流の学会企画の実施に、微力ながら努力していたのである。

その後の研究動向の進展において、日本の18世紀の西洋近代との共時性は、その独自性とともに着実に明らかにされてきている。そして、その新しい18世紀像につなげ、日本の近代化過程全体を見直すことは、ますます必要になっている。しかし、そのうえでなお、少なくとも、近代化をみる視点として、時間的差異と思想の国際転位とに着目し、後発受容地域こそが持ちうる近代の創発的深化の可能性を探るという試みは、使い古しになったわけではないだろう。近代の多様性の指摘に終わることなく、多元性と普遍性を同時追求する視点を失いたくない。繰り返しいえば、それは、戦前の「近代の超克」論を批判する方法意識であり、研究者自身が自らの歴史的社会的出自を思想問題として問いつける意識であった。今も、近代批判の高揚の中で、18世紀の共時的近代への安易な依存を警戒し、「近代の超克」論の再来を危惧する。

## Otium helveticum

秋元 陽平

出身校の過半の博士学生と同じく、はじめわたしもパリで数年過ごすつもりだった。だが一年の準備期間のつもりで滞在したジュネーヴに、そのまま留まって博士課程に登録することになった。ここで詳述しきれないさまざまな事情があったが、決心するに至ったのには、いまの指導教員であるJuan Rigoli先生に出会ったことが大きい。

彼はジュネーヴ大学でジャン・スタロビンスキーの指導を受け、膨大な資料を博捜しつつ19世紀初頭の精神医学とフランス文学の共犯関係と抗争の双方を描き出した博士論文——これはLire le Délireとしてスタロビンスキーの序文付きで出版されるに至った——に十年を費やしたのち、現代ラテン・アメリカ文学や医学史の専門家として、独・仏・伊・西語で執筆活動を縦横に展開し、やがて母校に戻り、伝統の一つである「医学と文学」の講義を受け持つに至った。該博な知性というほかないような人であるが、わたしの関心を引いたのは、この業界にあっては珍しくもない博識それ自体ではない。むしろセミナーで披露された彼のテキスト読解は、そうした博識をあえて一時的に封印するかのような「注意力のヴィルトゥオーソ」とでもいうべきものだ。ゴンクール兄弟やゾラの端書き、無名の医学者が寄稿した辞書項目で展開する妄想じみた自説や、ブリア＝サヴァランが随所から剽窃してきたにすぎないように見えるパラグラフなど、そもそも面白くも見えないか、あるいはその面白さがいわゆる名作との関連においてのみ自明であるかのように扱われてきた断簡零墨の、それもさして意味

論的負荷をもたないようにみえる片言隻句をじっくり観察することで、気づけば全体のニュアンスを裏返してしまう。講義中のテキストへの歩み寄り方にも、ある種のエレガンスがある。先行研究によって析出された問題系や、歴史的コンテクストを先んじて構えることをしない。独特の紳士的な言い回しで、テキストの一回性に敬意を払うようにしてごく簡単な執筆背景を概説したうえで、穏やかに一行ずつ、作家に寄り添うように読んでいくのだが、わずかな文体の乱れや、用いられるメタファー同士の微妙な不整合——聴衆はたいてい言われるまで気づかないのだが——を検知すると、その部分をゆっくり何度も読み上げて、聴衆と、それから書いた作家当人をそこで喚問するかのようにして、その文体それ自体が持っている認識論的価値について自省するようながすのである。

こうしてみると、いわゆるarmchair detectiveに似ているのだ。小さい頃、依頼人の靴についた泥からプロファイリングを披露できる名探偵に憧れた私は、そうすると文学研究のうちにその代替課題を見出していたのかもしれない。一見すると平凡な言い回しのうちにそれを制約する認識論的負荷を透視すること。トリヴィアルな細部の変様に異変をいち早く察知すること。スタロピンスキーの分析もそうだが、これは優れた医師の持つ臨床能力に似ている（探偵小説と医学の歴史的連関については、言うまでもない）。

ところで、わたしはこれまでジュネーヴ大学にてフランス文学の分野で博士号を取得した日本人を知らない。これには大学側が（少なくともこれまでは）さほど乗り気でなかったことも関係しているだろう。わたしは学籍登録に際して、さる先生に、フランスの大学と異なりスイスの大学の仏文科には自国文化広報の役割はないのです、と言われた。博士号は手土産では持たせまい、本国の学生と完全に同等の成果を求めるという念押しである。言わずもがな、と思っていたが、どうして博士生活にはすぐに暗雲が立ちこめた。スタロピンスキー以来のジュネーヴ学派（この定義については措く）の伝統は、ミクロレクチュールによって文体のうちに析出された微細な揺らぎを、マクロな文化史・知性史的背景のなかに置き直すという二重の作業によって特徴づけられるように思う。わたしのテーマは雑ぱくに言って、啓蒙転換期から19世紀初頭にかけてフランスの文学・医学・哲学に快苦の共存（混合感情）がどのように現れてくるかというものだが、これについて先述の二重の作業が要求するコーパスとは、当然ながら大小の医学辞典やパリ大学医学部に提出された博士論文、経験主義、ライプニッツ、メヌ・ド・ピランをはじめとする哲学テキストとその二次文献、前ロマン主義の作家の小説群など英仏独羅語を含む膨大なものである。むろん早々に自分を見失ったわたしは、しかし計画を放棄するにはあまりにも諦めが悪く、また心細がるにはあまりにもふてぶてしかった。レマン湖や町並みはなるほど美しいが、ジュネーヴというのはさほど刺激的な街ではない。どこに行き着くかわからない読解の気晴らしには向かない。そこで、暇さえあれば配偶者と共にヨーロッパ中を旅行し、マッターホルンをスキーで滑り降り、クレタ島では灼熱の日光に焼かれた。また所属していた大学オーケストラの団員たち（CERNの科学者や国連職員だ）とは方々に演奏旅行に出かけた。その他諸々の見聞録、旅行記についてはMercure des Artsというウェブマガジンに既に連載したのでここでは省くが、その冒頭で用いた比喻を使い回すならば、人生の真空地帯に放り込まれた『魔の山』のハンス・カストルプ宜しく、すべてを試験採用placet expeririしているような感覚に襲われた。ジレ・ジョーヌと極右の台頭に揺れる隣国のざわめきが聞こえてこない—あるいは、巧妙にノイズキャンセルされた—富裕な中立国で、なかなか互いに結びつかぬテキストの玉石のなかをあてども無く彷徨している……。端から見れば結構なご身分だとなるうが、浮遊感が常に快いとは限らなかった。そうこうするうちに2020年の疫病禍がやってきた。わたしたちは膨大な思い出と人の縁を海の向こうに残して日本に帰ることになった。すぐに戻れると思っていたが、今度は日本でも子どもを持つことになったのである。

始まった小さな子どもたちとの暮らしはなるほどひとつの現実との接点である。恒久的な睡眠不足、あまりにも頻繁な看病によって作業は絶え間なく中断され、無数の具体的な課題がせまってくる。しかしまた、初夏の夕べ、公園からの帰り、腕の中でいつのまにか眠った幼児の、細筆のような後ろ髪が吹き抜ける風で舞い、わたしの頬をくすぐるとき、海の底のように静かな世界の基底に足が着いた

ような感覚がある。これもまた現実なのか。

愉快的ことに、そしてまた厄介なことに、この文章は回想録ではない、つまり、どうにかこうにかして論文が提出されたという大団円を未だ持たないのである。わたしはいまや自分が、自らが立てた遠大な研究計画にそぐう能力や、それ以上に気性や根気の持ち主であるとは思っていないが、もはや後戻りの道はない。カストルプが戦場に行くことを想像するようにして、わたしは自身がこの論文を提出することを想像する。事実、予備審査を終えた今、その時期は早晩やってくる。探求そのものは連綿とつづく性質のものだとしても、そこで何かが終わる、わたしは自分自身について何かしらの目処をつけることを迫られるだろう。

## 『日本18世紀学会年報』第40号公開の遅延についてのご報告とお詫び

日本18世紀学会代表幹事 王寺 賢太

すでにお知らせしてある通り、当学会では『年報』の刊行形態を、次号第40号から基本的にJ-Stageでのオンライン公開に切り換える旨、2024年6月23日に大阪大学で開催された第46回大会総会で決議し、準備を進めてきました。寄稿者と年報編集委員会のみなさんには、例年通り年次大会開催前の6月に公開することを目処に、執筆・編集の作業を進めていただいていたところでした。

その編集作業がすでに最終校正にまで入った段階で、まことに心苦しいのですが、この間J-Stageでの『年報』公開に向けて当学会事務局から事前の学会登録の申請手続きをとったところ、この手続きには3ヶ月以上を要することが判明しました。したがって、『年報』次号をJ-Stage上で公開できるのは、早くとも2025年8月以降になります。

寄稿者と年報編集委員会のみなさまにおかれては、お忙しいなか鋭意進めていただいた執筆・編集の作業にもかかわらず、『年報』を例年通りのスケジュールで公開することがかなわない事態となり、まことに申し訳ありません。ひとえに当学会の運営を司る代表幹事と事務局の怠慢が原因であり、心からお詫び申し上げます。

現時点では、『年報』第40号は、8月以降可及的速やかに公開の予定です。正式な公開の日程が定まり次第、会員には学会メールでご連絡を差し上げます。

『日本18世紀学会年報』第40号は、第46回大会研究報告要旨等15点、論文12点、書評・展覧会評17点、会員業績28名分を集める、きわめて充実した内容となっています。どうか今回の『年報』公開の遅延にもかかわらず、今後とも当学会の活動への会員のみなさんのいっそう積極的な参加とご支援をお願いいたします。



### 事務局より

#### 幹事会・総会について

『学会ニュース』第103号の刊行以降、幹事会が以下の日程で開催されました。

2024年12月28日（土） 2024年度第3回幹事会

#### 『学会ニュース』のオンライン化について

『学会ニュース』は、第103号からオンライン形式での発行に完全移行し、会員の皆様へのお届け方法は、メールを通じて事務局のGoogle Driveのリンクから各自でダウンロードしていただく形とな

りました。なお、学会ウェブサイト上にはこれまでと同様、個人情報削除した抜粋版を掲載しています。メールを介した送付となっていますので、メールアドレスの登録がお済みでない方がいらっしゃいましたら、事務局までご一報ください。

### 会員名簿の公開について

2016年度以降しばらく発行を停止していましたが、会員同士の研究交流の活発化を図るため、2024年度から会員名簿の定期的な提供を再開しました。2025年度の会員名簿の閲覧方法につきましては、2025年5月16日に当学会からお送りしたメールをご確認ください。名簿に掲載する個人情報は最小限にとどめ、①氏名、②所属先、③メールアドレス（公開・非公開は選択可）、④現在の研究課題のみとしています。今後も毎年5月に会員名簿の更新を行う予定です。ご所属等のご変更があった場合は、マイページから速やかな情報の更新をお願いいたします。

### 『年報』への論文投稿について

大会での発表をもとにしたもの以外の論文も投稿できます。詳しくは年報または学会ウェブサイト記載の投稿規定をご覧ください。

### 投書欄について

この『学会ニュース』に投書をしていただくこともできます。事務局までお申込み下さい。

### 共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員の皆様からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事までご一報ください。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないと思われる方は、積極的にご推薦ください。）

### 『学会ニュース』のエッセー

会員によるエッセーの掲載を増やし、『年報』と並行して『学会ニュース』を会員同士の研究交流の場として活用していく方針となり、第104号には安藤隆穂会員、秋元陽平会員に寄稿いただきました。研究紹介、海外滞在記等、テーマは自由で、1200字程度のエッセーを随時受け付けていきます。会員の皆様からの積極的なご寄稿をお待ちしております。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。

### 寄付のお願い

寄付をご希望の方は事務局までご一報ください。こちらから振込方法についてお知らせいたします。

### 献本

学会宛に以下の図書をいただきました。お礼申し上げます。

- ・ 宇野木めぐみ『時代で読み解く一八世紀フランス文学 旧体制下の読書熱、サロン、哲学者たちの闘い』（大阪大学出版会、2025年3月）
- ・ クリストフ・ヴォルフ『バッハ 音楽創造の宇宙』、松原薫訳（春秋社、2025年4月）

- ・ フィリップ・レノ『啓蒙時代の礼節 法・習俗・マナー』、増田都希訳（法政大学出版局、2025年5月）
- ・ *Regards croisés sur la famille (XVIIe-XXe siècles) - images, récits, discours -, textes réunis et présentés par Eric Avocat, Noriko Mochizuki et Yoichi Sumi, Université Keio, 2024.*

### 新入会員募集

日本18世紀学会では、新規会員を募集しています。入会希望者は学会ウェブサイトの [入会案内] からいつでも入会申請が可能であり、幹事会では随時入会承認を行っています。非会員も入会した時点から大会の自由論題発表への応募の権利が生じます。会員の皆様も、ぜひ18世紀研究に関心のある方を当学会にご勧誘ください。

幹事会メンバー（50音順）：飯田賢穂（事務局）、出羽尚（年報編集）、岩佐愛（年報編集）、王寺賢太（代表幹事）、大石和欣（大会）、大塚雄太（大会／年報編集）、隠岐さや香（大会／国際学会副事務局長）、金沢文緒（事務局）、川村文重（事務局）、小関武史（事務局）、後藤正英（年報編集副委員長）、斉藤渉（事務局長）、菅原百合絵（広報）、武田将明（年報編集委員長）、玉田敦子（国際学会派遣委員）、永見瑞木（年報編集）

会計監査：井関麻帆、奥香織

日本18世紀学会ニュース 第104号 2025年5月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 王寺賢太

事務局 〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科 斉藤渉研究室 日本18世紀学会事務局

e-mail: [jsecs18@gmail.com](mailto:jsecs18@gmail.com)

<https://jsecs.smoosy.atlas.jp/ja>